



季節を知ったら
暮らしが楽しくなった

〜第三十三号〜

穀雨

四月二十日



慶光院邸跡

この春、宇治の町から一つの風物が消えました。浦田町溝の世古治いの慶光院邸跡です。駐車場整備のため、竹垣や藪がすっかりと取り払われ、アスファルトで舗装されました。町になじんだ旧跡だけに惜しむ声は絶えませんが、慶光院邸の昔話をしてくれる人がありません。

慶光院邸の近くに住む姑さんが十五世にあたる盈子さんと知り合いました。そうです。盈子さんは江戸後期に生まれ、昭和八年まで生きた方。なんでも盈子さんが白いドレスに日傘をさして、おはらい町通りを歩く姿がモダンであつたこと。ウナギが好きで、蒲焼の出前をとると屋敷に呼ばれ、一緒に食べたこと。その際、屋敷は暗くて、床もずいぶん凸凹していたといひます。

慶光院は伊勢神宮の衰退期に、初代守悦、三世清順ら尼僧が全国を勧進して浄財を集め、宇治橋や内宮外宮のご遷宮をなし遂げた功績が知られ、尼僧たちは上人と呼ばれていました。江戸時代には朝廷や幕府のために祈禱を行い、知行六百十二石を賜っています。

駐車場整備で、敷地北側の丘に佇む慶光院家の墓地が道からでも望めるようになりました。墓地には大きいもので二m以上もある上人たちの五輪塔や一族の墓石がずらりと並んでいます。清順上人の五輪塔は永禄九年の文字がはっきりと読めます。そこに盈子さんの名を刻む墓もありました。

一番新しい墓石は平成二年に建立されたもの。当家ご夫妻の名が刻まれています。墓前には小さなタケノコがお供えしてありました。邸跡もずい分と竹が茂っていたものでした。惜しむ春の昼下がりのことです。

文 千種清美